



タンチョウ博士のお話（第19回）

○タンチョウは長沼の鳥になるだろうか？

長沼町に昔、タンネトーという沼があった。今の北長沼地区の西1線15番地あたりで碑も建っている。「タンネ」が「長い」で、「トー」が「沼」を現すアイヌ語だから、まさしく町名にもなった長沼だ。

そこに、タンチョウがいたかどうかは知らない。しかし、馬追丘陵の西の低地は、いたるところに沼や湿地があり、ツルの名所だった地帯なので、おそらくタンネトーにもいただろう。

北海道では、15世紀ころから和人の支配が強まり、19世紀後半まで主に松前藩が統治していた。その歴代家老のなかに、松前広長という人がいた。学者肌で、多くの本の著者としても知られる。

彼はその著「松前志」のなかで、“他人はタンチョウを水鳥の仲間としてしているが、それは違う。山・森・野原などのトリでもなく、広い沼沢地（湿原）に住む類まれなトリだ！”と喝破した。

それもあって、道産子はもちろん、日本人はだれも、いや、この鳥を知る世界中の人々が、タンチョウは開けた湿原に巣を造り、そこで子を育て、餌をとり、湿原を“終の棲家”とする種と思ってきた。もちろん、私もその一人だ。

ところが、である。近年写した写真①を見てほしい。これでは森に住むと言っておかしくないし、写真②なら畑のトリと呼んでよい。松前広長がこれを見たら、なんと言うだろう。

生物の中には、^{けいかん}景観の様子が変わると生活できないものも多い。

しかし、タンチョウは環境の変化にうまく応じられる生きものだ。それを可能にしているのは、ヒトと同じように、動物も植物も食べる雑食性のせいである。しかも、食べる動植物の種類も多く、いわゆる^{こうじょくせい}広食性を備えた雑食である。

食べ物が豊かで、^{りんしょう}巣材が多少でもあり、天敵も少なく安全なら、彼らは森林（ただし林床は湿地）のトリとして営巣し、子を育てる。

もし、似た環境が畑近くにあり、ヒトは無害な、むしろ餌をくれる有益な動物だと学習すれば、畑の、と言うより“庭のトリ”にだっとなりうる性質を備えている。だが、それでもよいというのだろうか。

これまで人間の働きかけで、森や庭のトリになるようタンチョウを仕向けてきた。しかし、彼らの本来の棲みか^すは湿地である。だとすれば、彼らをその場へいざなう働きかけを私たちはする必要がある。

タンチョウは、多種多様な動植物を餌にすると上に述べた。つまり、タンチョウが暮らしているのは、さまざまな生き物がそこに住むことの証である。そこでは、それぞれの生物が互いにかかわり合いながら、まとまったシステムを持ち、豊かな自然を^{かたちづく}形作る。タンチョウと共に生きるとは、そうした自然を長沼の町に創り、維持することに外ならない。（文：正富宏之）



写真① ハンノキの森の中で営巣し、卵を抱くタンチョウ（撮影：タンチョウ保護研究グループ）



写真② 牧草地の中に残された、開墾した木の根を積んだ土盛り上で、巣を造り卵を抱いているタンチョウ（撮影：正富宏之）